

## ◇熊野権現

天竺の常世思想が我が国に流れ来たったのは、シュメルに繋がるドラヴィダ系アーンドラ王朝やマガダ国と何らかの接触があつてのことだろう。

「解説編」「倭国と天竺のかかわり」の中で述べてきたごとく、バラモン神の教え以外にも、マガダ国大王にまつわる逸話が『神道集』に「熊野権現の事」として記されている。熊野でも、天台山山王に昇りつめた御仁が我が国に飛来して、神武天皇御代に熊野権現となつて顕れたとする「熊野権現垂迹縁起」が伝わっている。

## 『神道集』熊野権現の事と「熊野権現垂迹縁起」の要旨

その昔、ある御仁が唐の靈山から天台山にある王子晋という仙人の旧跡を慕つて、鎮西豊前国英彦山に天降りなされた。その形は、高さ三尺六寸の八角形の水晶石であつた。

その後、あちこちに在所を求めて長い年月を送つた後、熊野権現として顕れなされた。神武天皇の治世四三年のことである。彼の権現は天照大神の頃の人であるが、示現された地は全国に広く行き渡っている。

一、天竺のマガダ国大王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この剣を投げて、落ちた所に行こう」と言つて五本の剣を北に向けて投げ、妃や王子と一緒に空飛ぶ黄金の車に乗つてこれを追いかけた。

五本の剣は天竺や中国には留まらずに、小さな小さな日本秋津島に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神蔵（神倉山、熊野速玉大社の旧社地）、一本は筑紫の英彦山、一本は陸奥の中宮山、一本は淡路の和（遊鶴羽峰）、残る一本は伯耆大山に留まった。大王の車は、五本の剣を追いかけて英彦山に到つた。そこから各地を転々として、最後は第一の剣に従つて紀伊国牟婁郡（熊野）に留まった。大王はこの国に来て、七〇〇〇年間、姿を顕さなかつた。

一、唐の天台山の地主神・王子信が鎮西英彦山に天降った。その者は高さ三尺六寸で八角の水晶形をしていた。ついで伊予の石鎚峰から淡路の遊鶴羽峰に渡り、さらに熊野の神倉峰に降った。  
〔地元の伝説〕、「神武天皇は熊野の賊を退治できたことで、神倉山に登って十握劍（一説では布津御魂）を捧げ持ち、天照大神（一説では高皇産靈）にお礼の言葉を申し述べた」

☆王子信については、天台山から飛来する山王として厚く尊敬され、中国はもとより奈良・平安朝の文人らにもなじみ深い人物だった。

〔天台山〕、天台山は浙江省東部の天台県北方、二キリに聳える靈山。古くは、神仙（天台道教）の靈山として名をなしていた。

五七五年に、智顛らが入山して天竺直伝の法華経を唱えて根本道場としてからは、仏教の中心地に成り変った。平安初期に入唐した最澄は、天台山で法華経・達磨系禅宗などを修めた後、比叡山に寺院を建立して天台宗として教え広めた。その護法神にあたる日吉神社は、大山咋神（大歳神の児、素戔嗚の孫）を山王として祀ることで、山王とも山王権現とも呼ばれた。

邪馬台国期の国のかたちがバラモン神の教えに沿っているのも、日神が天上に君臨したごとく振る舞うのも、スメラミコトの呼称がシメメルやスメラ山に由来するのも、さらに牛頭天王が仏陀ゴータマと読めるのも、天竺のマガダ国大王が我が国に流れ来ったからに相違あるまい。

このマガダ国大王は、江南に聳える天台山道教の山王に担がれた後、豊葦原中つ国の大穴持や大國主に昇りつめた。さらに伊奘諾の養子に入って豊受皇太神と語り、仏法流布や常世づくりに入れ込むらしい。ではいつ頃、何処に流れ着くのか、どう動いたのか、以下から見通せるはずだ。

伊勢神道によると、豊受（天照）皇太神と日神は、伊奘諾の児として外内宮の主座（伊勢大神）に鎮座している。ならば、皇太神は日神の天照大御神とも同等の地位にあつて然るべきだが、なぜか「記紀」にその名が出てこない。ヒミコの名もしかりだ。

筆者は邪馬台国の最重要人物であるこの二神について、その事績を明らかにして実態に迫りたいと奮闘努力した。その結果、以下のことが明らかになった。

①豊受（天照）皇太神は「記紀」にその名が見当たらないものの、伊勢神道や真言密教の本地垂迹説、あるいは古社の縁起では頻繁に登場してくる。それだけではない。彼は天照大神の異名も有しており、日神より上位の神とされてきた。

外宮の伊勢神道や石上神道の伝えるところでも、天照大神は男神とされてきたし、学識の間でも「女神の天照大神以前に、男神の天照大神が存在した」と説く向きがある。

にもかかわらず、『古事記』の天照大神も『日本書紀』の天照大神も、女神だけのごとく記されてきて、男神天照大神と匂わせる記載は一切見あたらない。それは、次のことに起因している。

「彼は伊弉諾太子でありながら大乱の引き金を引き、倭奴国王朝を転覆させた。それ故、帝紀や旧辞から抹殺された。だが彼の血を引く「記紀」の編纂者たちは、女神天照大神の事績に男神のそれを密かにつけ足した。我々はそれも女神の事績と思いつまされてきた」

②ここで、熊野権現や皇太神すなわち天照大神の生い立ちについて考えたい。これを解く鍵はほぼ揃っている。熊野縁起は「熊野権現は伊勢太神と一体である」とし、熱田縁起もこう伝える。

「熱田明神は、熊野権現、伊勢太神と一体分身である」

「熱田明神の大日如来は、天照大神であり、天叢雲剣にほかならない」

物部氏寄りの『ホツマツタエ』も、天照大神が志摩伊雑に宮を置いていたとする。その伊雑宮（磯部宮、三重県志摩市）は、徳川期の朝廷や将軍に訴状を出して、こう主張してきた。

「伊雑皇大神宮は日本最初の宮で、後に内宮ができ、次に外宮ができた」

「当宮は天照大神を祀り、内宮の別宮（遥宮）である。伊勢太神は当地から遷された」

熊野権現が伊勢太神と一体か否かについては、後白河院が熊野行幸を始めた一一六〇年の三年後

に、議論が沸騰した。結果はこれを否定するところに落ち着いたが、筆者がこれに深く思いを巡らし、心にその意を悟った限りでは、縁起どおりに、熊野権現すなわち天竺のマガダ国大王は、熱田明神、伊勢太神、男神の天照大神に他ならないと断じざるを得なかった。

③次に、彼の生い立ちはどうだったのか。いつの頃に、いかなる業績を挙げたのか。これを解く鍵もほぼ揃っている。その一つは、「神事芸能」大社の段、加賀神社（島根県松江市）に伝わる縁起、『出雲国風土記』『島根郡』の条にこうある。

「神事芸能」加賀神社の縁起、「天照大神の生所とするために、加賀の潜戸と名づけたり」  
☆加賀神社は、伊奘諾・伊奘冉・天照大神・キサカ姫・猿田彦を祀る。近辺には、猿田彦の遊び育った伝説がやたらと残る。

『出雲国風土記』『島根郡』や佐太神社縁起、「（加賀潜戸は）佐太大神の生れましし所なり。母のキサカ姫は『聞き岩屋なるかも』と言って、金の弓矢を持ち射給いし時に、光輝けり」  
いま一つは、出雲大社と佐太神社がとり行う神在祭にある。それは陰暦十月の神無月（出雲では神在月と呼ぶ）に、竜蛇神と呼ばれる「神のお使い」が南洋から島根半島に流れて来て、丁重に迎えられる儀式を言った。そのお使いとは、荒れた海から浜辺に打ちあげられる背黒海蛇（腹面が白く背の黒い毒海蛇、インド洋や太平洋に分布）だ。

背黒海蛇が神のお使いとされた所以は、両社の祭神がオロチであること、海蛇の鱗が六角形であること、白一色の胸辺りにぼつんとある黒い鱗が両社共通の亀甲神紋（六角形）に見えることにある。つまり、南洋から海流に乗って流れ来る背黒海蛇の生体は、オロチと呼ばれる天照大神の生国や漂着先を教えているようであり、この御仁を尊ぶ両社の紋つきを羽織った格好までしていて、神（水天神天照大神）のお使いとして誠に相応しい生き物なのだ。

④これでわかるように、皇太神の生い立ちは複雑極まりないが、簡潔にまとめるとこうなる。

「中国に渡来した天竺のマガダ国大王は天台山にこもって修行していると、たちまち天台道教の山王に担がれた。一六〇年代中頃、島根半島に流れ来て、しばし加賀瀬戸で修行してきた。そこでも、彼の仁徳や非凡さが知れ渡って佐太国の佐太大神や大穴持に、ついで杵築国の大国主に担がれた。さらに豊葦原中つ国の建て直しを懇請された上に、神皇産霊や国常立を襲名して金の弓矢を授かった。

当時、神国・常世づくりに四苦八苦してきた伊弉諾は、大穴持が天竺の常世思想に加えて、仏法と学問に並外れた才があると聞くや、天竺を凌ぐ常世を実現したいとして養子に取り込んだ。同時に彼の後釜として、豊葦原中つ国の祖、厳香具土（国常立）につながる厳香来雷（担ぎ出した）その結果、大穴持は伊弉諾の愛児（真名子）となつてとんとん拍子に出世し、豊受（天照）皇太神（皇太子）の位に昇りつめた。その後は、義父とともに仏法流布・常世づくりに走り回つた。当時の国づくりを検証していくと、五帝期や天竺の真似（ご）がそこ彼処から見つかるとはならずだ。

⑤ これらを総合して、以下の事績にたどり着いた次第だ。

「天台山山王に昇りつめたマガダ国大王は、島根半島に飛来して山王、牛頭天王、神皇産霊、佐太大神、大穴持、大国主と語つた後、豊葦原中つ国王に駆け上つた。大乱前に伊弉諾の養子となつて月読、熊野櫛御氣野（熊野権現）、御饌津神、次に向津姫に婿入りして豊受（天照）皇太神と語つたが、一八〇年代中頃、義父伊弉諾に謀反して邪馬台国を興し、天御中主、天叢雲、水天神天照大神、大蛇、倭大物主、所造天下大穴持、豊受大神、高皇産霊など名を使い分けてきた」以下、男神天照大神と深く関つてきた「牛頭天王と磐座信仰」、蓬萊山東麓を舞台とする「白髭神社と謡曲白髭／蓬萊郷と仏法・山王信仰の聖地」についても、じっくり検証して行きたい。

これが正しいかどうかは、本物語を読み通して判断して頂きたい。